



War Cry

9月号

福音版
2025
September
No.2893

二〇二五年 九月一日 発行

明治二十八年 創刊

福音版・毎月一日発行 広報版・奇数月十五日発行

神様の愛に押し出され

西村 保



一八九五（明治二十八）年九月四日、救世軍の創立者ウィリアム・ブースが宣教のため派遣したエドワード・ライト大佐ら、救世軍士官（伝道者）の一行十四人が横浜港に上陸しました。彼らは日本の着物を着用して、横浜の地を踏んだのでした。その当時のことを表した文書の挿絵には、日本人が一行を指さして笑っている姿が描かれています。ライト大佐一行が着用した着物は、実は浴衣（当時の寝間着）で、それに細紐を締め、大変、滑稽な日本上陸となっていました。しかし、それは、イエス・キリストの救いを伝え、日本を愛そうとする心意気、土着化して同化しようとする思いが現れた姿でした。困難も多い中で彼らは宣教し、後に多くの日本人をキリストに導く礎となりました。ライト大佐たちをそれほどまでに駆り立てたものは何だったのでしょうか？

聖書は「キリストは、神の身分でありながら、神と等しい者であることに固執しようとは思わず、かえって自分を無にして、僕の身分になり、人間と同じ者になられました。人間の姿で現れ、へりくだっ

て、死に至るまで、それも十字架の死に至るまで従順でした」（フィリピの信徒への手紙2章6～8節）と記しています。神であるイエス・キリストが人間の形をとって、この世に来てくださった、まさしく土着化、同化して人間に対する愛を示してくださったのです。

天地万物を創造された父なる神様は、すべての被造物の中で人間を特別に尊いものとして造られました。そして人間の中にある神様の喜ばれない心「罪」から人間を救うために、大切な独り子であるイエス・キリストを、人間の姿でこの世に送り、十字架にかけて私たちの身代わりとしてくださいました。聖書では父なる神様の愛を「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである」（ヨハネによる福音書3章16節）と教え、イエス・キリストの愛を、「イエスは、わたしたちのために、命を捨ててくださいました。そのことによって、わたしたちは愛を知りました」（ヨハネの手紙1章16節）と教えています。

この神様の愛が、ライト大佐一行の心に働きかけ、日本で日本人のようになり、共に暮らし、神様の愛を説くことを望ませたのです。

一八九五年九月二十二日、救世軍日本開戦式をキリスト教青年会館でおこなったこの日を日本での救世軍の創立記念日として、今年で百三十周年を迎えようとしています。

「神御自身、『わたしは、決してあなたから離れず、決してあなたを置き去りにしない』と言われました。……イエス・キリストは、きのうも今日も、また永遠に変わることのない方です」（ヘブライ人への手紙13章5節、8節）と記されているように、これまで「神様の愛」はひと時も変わることなく、これからも変わることがありません。この変わらない神様の愛を、スープ、スープ、サルベージンという三つの言葉で表す働きを、救世軍はこれからも実践してまいります。

どうぞお近くの小隊（教会にあたる）をお訪ねください。そしていつまでも変わることのない神様の愛に触れてみてください。神様の御祝福をお祈りいたします。

（救世軍士官（伝道者））

ファミリー聖別会で
キッズタイムを導く聖別会の前に小隊前で
バンド演奏

子どもたちと関わり、 一緒に成長しながら

田辺 真理子 さん

(救世軍福山小隊所属)



子どもの頃の思い出

救世軍の小隊(教会にあたる)は、すべての人の心の居場所です。毎週日曜日には、賛美歌を歌い、心を合わせて祈り、聖書のメッセージを聞く礼拝の時をもちます。また、地域の方々への奉仕活動の拠点でもあります。広島県福山市にある福山小隊に通う田辺真理子さんに、信仰の歩みをお聞きしました。

私は、救世軍の士官(伝道者)だった祖父母と、父母がクリスチャンの家庭で育ちました。小学生の頃から広島県尾道市にある尾道小隊(教会にあたる)の日曜学校に通い始めました。当時は日曜学校の子どもたちも多く、季節の良い時は、遠足に行き、少し年上のお姉さんたちに親切にしてもらって嬉しかったことが心に残っています。

中学・高校生時代は聖別会(日曜礼拝)へ出席して、オルガン伴奏の奉仕をしていました。大人の人たちが、信徒の学び会や伝道集会、女性の集い主催のバザー、会館のお掃除など、日曜日以外にも小隊に来て、よく活動されていることを、礼拝の中で証言を聞いて知りました。その方々が活発に奉仕されている姿から、信仰の先輩として多くの感化を受けました。尾道小隊の女性の集いでは、お茶、お花の先生が来て教えてくださったり、料理実習をしたり、誰でも参加できる会でした。子どもの頃は、愛餐会(小隊で皆で食事)の思い出も多いです。夕方、子どものための聖書の学び会があり、グリーンピースが上についたおいしいカレーライスをいただきました。また、特別なゲストを迎えた聖別会後の愛餐会、特別集会の前の愛餐会など、準備をしてくださった方々の顔が今も思い浮かびます。一緒に食事をしていただくとおいしくて、幸せな記憶として残っています。また、「隣の小隊」である岡山県笠岡市にある笠岡小隊の青年たちとのラッパ練習に、弟と一緒に通っていたことも楽しい思い出です。あまり練習をしていなかったもので、変な音が出ていたかもしれません(笑)。

私は、中学生の時に、自転車通学の途中で交通事故に巻き込まれましたが、ほとんど怪我もなく帰宅することができました。もしかしたら、あの時、命がなくなっていたのかもしれない……と考えると、今になって大きなお恵みをいただいたのだと思います。

兵士入隊(救世軍の正式な信徒となること)は高校生の時でした。「初めは一年生からでいい、少しずつ信仰が成長しますように……」と決心してのことでした。その後も毎週、聖別会に出席し、夏には救世軍主催の音楽キャンプ等に出かけることを楽しんでいました。

神様に導かれて歩む人生

京都の短期大学に進学し、卒業後、尾道に帰りました。社会人となり、カトリックの幼稚園に勤めることに

聖書に「だから、明日のことまで思い悩むな。明日のことは明日自らが思い悩む。その日の苦労は、その日だけで十分である」(マタイによる福音書6章34節)とあります。働き始めた頃、悩んだり、立ち止まったりした時に、この御言葉によっ



(上) 尾道小隊にて。前列一番小さい赤ちゃんが私。その右が祖母、前列左端が祖父、後列左から二人目が母。
(下) 尾道小隊にて。家族で合唱。両親と第二人、私。

て励まされました。

その後、福山小隊で結婚式を挙げていただき、子どもに恵まれて、両親や息子、夫と一緒に小隊に行くようになりしました。子どもが小さい頃は、専業主婦で、子育てに迷いながらも、同じ悩みを抱えた地域のお母さん仲間や、母に助けてもらいながら、夫に愚痴を聞いてもらいつつ、たくさんさんの良い経験を経ることができました。子育て中は、自分が思ったとおりにいかないことが多くありましたが、「自分の思いばかりを主張するのではなく、子どもと適度な距離を保ちつつ、お互いが認め合えるように、話ができるようにしてください」とただひたすらに祈っていました。



日曜学校での工作タイム



女性の集いで分かち合い。右奥は母。

小隊で、日曜学校教師になりませんかと話をしていただいた時、「イエス様のようにしてください」と祈りながら決心しました。そこから、日曜学校の奉仕が始まりました。

子育てを終えて二度目の就職も、同じ幼稚園で働かせてもらえることになりました。キリスト教精神が保育の根底にあり、子ども自身が愛される存在であることを大切にしている幼稚園でした。「子どもの気持ちかわかる先生になってくださいね」とアドバイスいただきましたことが心の糧になっています。職員朝礼はお祈りで始まり、昼食のお祈り、帰りの時も聖歌を歌うなど、折に触れ、神様や聖書のお話を聴くことができる環境でした。その中で、小さな

子どもたちと一緒に過ごした時間は、神様からの大きなお恵みと感謝しています。仕事を続けながらも、日曜日には小隊に行き、日曜学校、聖別会に参加できたことは大きなお恵みで、今まで導いてくださった尾道福山小隊の士官の方々、信徒の方々、両親にも感謝しています。

私が生涯、大切にしている御言葉は、「わたしは良い羊飼いである。良い羊飼いは羊のために命を捨てる」(ヨハネによる福音書10章11節)です。「良い羊飼」とはイエス様のことです。毎週日曜日にはイエス様の憐れみと慈しみの心に触れて、また一週間お導きください、とお祈りしています。

子どもたちと一緒に

二〇二三年の秋に青少年部曹長(小隊での青少年のための働きかけの責任をもつ役員)という任命を受けました。青少年部曹長に、という話をいただいた時、これは重い任だから大変だと思いましたが、あまり大変だと悩まずに、さっと引き受けることができました。そして子どもたちに励まされながら、

活動を続けています。

福山小隊では日曜学校を三人のお子さんと毎週続けています。小隊士官(牧師にあたる)が聖書のお話をし、その後、私がちょっとした工作などを指導するといったプログラムです。私が青少年部曹長になった初めての頃は子どもたちもまだ小さかったのですが、まず座ってお話を聞くことを目標にしていましたが、ここ最近、子どもたちはそれぞれ成長して、お話を聞いて質問をしたり、受け答えがとても上手になってきたと感じています。子どもたちがどんどん成長する様子を見せられて、小隊士官と一緒に喜んでいきます。青少年部曹長をやっているうちに、楽器にも興味をもってきた子、夏、夏の音楽キャンプに参加してから、メキメキと上手になって、大人に交じって小隊のブラスバンドでラッパを吹いています。私

もがんばらないか、と思っています。いつも子どもたちからいろいろなことを教えてもらっています。

日曜学校のほかにも一つ、福山小隊では二〇二三

年から、地域の子どもたちの居場所づくりとして「あそびバ」を始めました。小隊士官のアイディアで、私も「それはいい、一緒にやりましょう」ということになり、木曜日の午後四時から五時の間に小隊の会館を開けています。地域の子どもたちに自由に過ごしてもらう時間なんです。ここは教会なので、説教壇には上がらない、恵の座(祈りの場所)には座らない、ということとは伝えてあります。最初来た時は小学校の中学年だった子たちが、今は高学年になり、友だちを誘って大勢来ています。

子どもたちはそれぞれ好きな遊びをしています。「あそびバ」(遊び場)なので、決まったプログラムはないんですが、年に三回、クリスマスのお話をする日とイースターのお話をする日、夏に子ども会でも聖書のお話をする日と決めてあります。今年のイースターの時は、子どもたちもお話をよく聞いてくれました。

私は今年の三月で幼稚園を退職しましたが、子どもたちと関わっていたという願いがあり、職探しに行ったところ、家のすぐ近く

の保育園で二時間だけ働くことができるようになりました。木曜日は「あそびバ」のために時間を空けて、それを楽しみに、子どもたちと一緒に、私も成長させてもらいたいと思っています。

「いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。どんなことにも感謝しなさい。これこそ、キリスト・イエスにおいて、神があなたがたに望んでおられることです」(テサロニケの信徒への手紙1章16節)

という聖書の言葉があります。私が子どもの頃、イエス様を信じる約束をした時にいただいた聖書に、士官がこの聖句を書いてくださいました。以来、このような人でありたいと思い、ずっと心に留めています。

最近、心に響いている賛美の歌は、「神の国とその義をまず求めなさい。そうすればみな与えられる。ハレル ハレルヤ」という歌です。日曜学校で子どもたちと一緒にハーモニーをつけて歌っています。これからはイエス様の導きの中に、子どもたちと一緒に歩んでいきたいと思っています。



世界をみつめて

〈ミャンマー〉大地震被災者支援

今年 3 月 28 日の大地震発生後、救世軍の支援チームはこれまでに 3 回、マンダレーと首都ネピドーで支援活動をおこない、2,700 人 (650 世帯) が食料セットを、2,250 人 (550 世帯) が飲料水を、800 人 (200 世帯) がマットレスやソーラーライトなどの生活資材を受け取りました。

6 月 19 日にはネピドーで、地震の影響を受けて深刻な困難に直面している家族に支援物資を配布しました。ボランティアは事前に家庭訪問を実施し、



被災状況や生活実態を確認して情報を収集しました。その結果をふまえ、特に被害が大きく、経済的にも困窮している 100 世帯を優先的に特定し、食料 (米、食用油、レンズ豆、安全な飲料水) と生活資材 (ソーラーライト、毛布、マット、蚊帳) を届けました。

被災者の一人、ドーチャーチーさんは、地震で夫を失い、絶望の中で子どもと生活を立て直そうとしていましたが、これまで他の団体からの支援は一切ありませんでした。そのような中で救世軍の支援が届き、彼女は涙を流して喜んでいました。

〈米国〉テキサス州洪水被災地での支援

7 月 4 日に米国テキサス州でグアダルペ川の氾濫^{はんらん}によって壊滅的な洪水が起こり、100 人以上の命が奪われました。この災害に際して、現地の救世軍の緊急災害支援チームは速やかに対応し、カービル、ハント、イングラムの避難所で食事や飲み物、精神的・霊

的ケアを提供しました。カービルでは 3 台のキャンティーンカー (移動給食ユニット) が出動し、ハントにはさらに 2 台が派遣されました。イングラムでは 24 時間体制で、緊急支援活動に携わる人々への支援がおこなわれました。

この洪水は、米国の過去 100 年で最も深刻な洪水災害の一つとなりました。救世軍は、食事や飲み物、清掃キット、衛生キット、毛布などを配布するとともに、緊急支援チームの精神的ケア専門スタッフが、被災者の声に耳を傾け、悲嘆の中にある人々と共に祈り、心の支えとなるよう努めています。

救世軍は、地域社会や州の当局と連携して、寄付物資の受け入れと管理をおこなっています。(2025 年 7 月 9 日報)



救世軍とは? What is the Salvation Army?

救世軍は、世界 134 の国で活動するプロテスタントのキリスト教会で、国際本部は英国ロンドンにあります。1865 年、英国のメソジスト教会の牧師ウィリアム・ブースと妻カサリンによって始められ、東ロンドンのスラム街で困難な生活状況にある人々に助けの手を伸べつつ、神様の愛を伝えてきました。

日本では 1895 (明治 28) 年に英国から士官 (伝道者) が派遣されて活動が始まりました。救世軍の創立当初からのモットーのひとつは、「スープ (Soup: 食事)、ソープ (Soap: 石けん、衛生)、サルベーション (Salvation: 救い)」です。具体的な生活の支援によって人々に奉仕し、それらの働きの土台であるイエス・キリストにある愛と希望が広がることを願っています。現在、日本では小隊 (教会にあたる) での伝道や地域奉仕とともに、病院、社会福祉施設 (保育、児童養護、高齢者支援、女性自立支援、アルコール依存症者回復支援) を通しての働き、街頭生活者支援、災害被災者支援などの活動をおこなっています。

毎年秋の「感謝祭募金」は、このような日本国内の救世軍の働きへのご支援をお願いするものです。救世軍に属する者がまず献^{ささ}げると同時に、広く皆様にご協力をお願いしております。ご理解とご支援を賜^{たまわ}りますなら幸いです。



〈ご案内〉

世界の救世軍の指導者

リンドン・バックingham 大將 及び
ブロンウィン・バックingham 中將
11 月来日

救世軍 全国大会 2025

—新しい地平線へ—

11/22 (土) 午後 2 時
バンドレイジング・チャリティー・コンサート
於：東京都 中央区立日本橋公会堂
11/23 (日) 午前 10 時
大会聖別会 (礼拝)
於：東京都千代田区 日本教育会館9階

☆『キッズ・ゴスペル』コーナー☆ (子ども向け紙面)



左の QR コードから、今月の『キッズ・ゴスペル』を閲覧できます! 聖書のお話も動画で見られます。ぜひ、ご覧ください!

救世軍公報 ときのこえ

発行日 福音版 / 毎月 1 日、広報版 / 奇数月 15 日
定 価 福音版 / 1 部 40 円、広報版 / 1 部 100 円
(税込) クリスマス特集号 (12 月 1 日号) / 1 部 100 円
振 替 00180 - 5 - 4400
発行兼 救 世 軍
印刷人 代表者 スティーブン・モーリス
編集人 山谷 真
発行所 救世軍本営 <https://www.salvationarmy.or.jp>
〒101-0051 東京都千代田区神田神保町 2-17
電話 03-3237-0881 (代表)
Mail jpn.editorial@jpn.salvationarmy.org
印刷所 コーチ印刷



聖書は新共同訳を使用しています © 共同訳聖書実行委員会 © 日本聖書協会 救世軍は、旧統一協会、エホバの証人、モルモン教ではありません。これらの問題でお悩みの方は、下記救世軍にご相談ください。

【取り扱い支部】

救世軍への連絡をご希望の方は、以下の中から該当する項目及び住所氏名をご記入の上、救世軍本営(左記)、もしくは、上記救世軍にご連絡ください。
・私の近くの救世軍を紹介してください。 ・キリスト教についてもっと知りたいです。
・『ときのこえ』の購読を申し込みます。 ・相談を希望します。